

わたしたちの  
ゼミへようこそ

## 磯部ゼミ

HIROYUKI ISOBE  
SEMINAR自由で  
インタラクティブな学びの場  
自分らしく学ぶ

磯部先生のゼミは、指定された文献の内容や学生自身の論文構想について発表することを中心に展開していきます。

前期では、3年次の事前課題発表のほか、多民族都市ウィーンの文化を扱った文献講読に取り組みました。

発表者は、発表方法やレジュメの形式について自由に工夫することができません。どうしたらうまく伝わるかを考えながら準備することで、おのずと自身が担当する箇所への理解が深まります。また、自身の理解を整理していくことは、理解が不十分な点や疑問点などを洗い出すことにもなります。磯部先生は分からなかった部分や疑問などを聞き手に投げかけることを重視してくださるので、文献を読んでいて腑に落ちない箇所があった際は、ほかの歴史的事象と照らし合わせて自分なりに考えをまとめてから授業に臨むようにしていました。そうすることで、学びが豊かになっていると感じました。

磯部先生の専門はドイツ史であるた

め、履修する学生は歴史学的視点をも身につけていくこととなります。ゼミ以外では歴史学以外の授業を受けられまので、ゼミに入るまでの私の頭の中は、さまざまな分野の方法論が氾濫している状態でした。

ゼミでは、文献で説明されていることを歴史的背景と結びつけて学んできます。また私は歴史学的視点とは何かということに完全に理解できているわけではなく、先生による解説やゼミの先輩方の発表から思考方法や方法論を学んでいる最中です。しかしながら、ゼミでの学びをおして、歴史と文化、過去と現在、あるいはドイツ語圏と世

界が密接につながっているさまを発見することができています。歴史用語の丸暗記に終始した中高時代の勉強とは違い、大きな関心を持って取り組んでいます。

後期になると、いよいよ論文の執筆に入っていきます。4年生は卒業論文または卒業研究、3年生はゼミ論文に取り掛かります。3年生は夏休み中にゼミ論文の構想を作成するのですが、形式、テーマの選定、構成に至るまで知らないことばかりで、一つの論文を練り上げる難しさを知りました。しかし、夏休み中には数回にわたって先生に添削していただく機会が、授業においては論文の書き方を繰り返し学ぶ機会があります。具体的なコツも教えていただけるので、何度もやり直すうちに論文作成の要領を掴むことができます。

ゼミに入ってから直面し、今なお難しいと感じている問題は、自分なりの視点を見つけないということです。ゼミ論文のテーマを決めても、まだ視点を



## 磯部ゼミとは

文学部のドイツ語文学文化専攻に設置されているゼミで、ドイツの歴史や現代社会をテーマに研究を進めています。前期は課題文献の紹介と3年生の事前課題の発表を行い、後期は3年生のゼミ論文および4年生の卒業論文・研究の構想を発表する時間が持たれます。文献講読や先生の講義から歴史学的な考察方法を学びつつ、発表を通してレジュメの作り方やプレゼンの方法を実践的に学ぶことができます。また、ほかの学生の発表を聞くことにより自分にはない視点を学ぶ機会を得られるほか、自分の論文や発表を準備するうえで大きな刺激を受けられます。ドイツの歴史や現代社会の分析が中心になるとはいえ、論文のテーマは学生によってさまざまなので、ドイツ語圏の文化や社会を多面的に捉えられるようになります。磯部ゼミで多くの学問的方法や視点に触れることは、自分が本当にやりたかったテーマを発見するきっかけにもつながります。

## Report

うたがわめぐみ  
宇田川 恵

文学部人文社会科学  
ドイツ語文学文化専攻3年  
私立恵泉女学園高等学校  
(東京都) 出身

Message!

# 歴史から見えてくる ドイツ社会の多面性

いそべ ひろゆき  
文学部教授 **磯部 裕幸**

このゼミでは、ドイツ語文学文化専攻の3年生9人、4年生12人が主にドイツ史を学びながら、それぞれの興味関心に従って研究を進めています。また最近では、環境やジェンダー、少子化、労働の在り方など、現代の日本でも社会問題化しているテーマを取り上げる人も増えています。その意味でこのゼミは、過去と現在におけるドイツ社会のありようを多面的に分析しているといえるでしょう。学生の知的関心が実に多様なことは、昨年度の卒業論文のテーマが示す通りです。



「ビスマルク外交をめぐるさまざまな評価について」「ドイツの事例から考える日本林業再生の可能性」「環境政策に果たしたプラント政権の役割」「近代ドイツ語圏における『中欧構想』について」「カレル・チャペクから考える戦間期チェコスロヴァキアの民主主義について」等々。

これらは、扱う時代も論じる対象もまちまちで、一見このゼミのまとまりのなさ示しているかのように思えます。しかし卒業論文はどれも、ゼミでの主体的な学びを通じてみずから「問い」を発見し、「ドイツとは何か?」「ヨーロッパとは何か?」ということを真剣に攻究した成果です。「論文を書く」という、それ自体大変な作業の中でみずから考えたこと、あるいは自分の立てた「問い」と真剣に向き合ったことは、皆さんの一生の財産になると思います。在生時も、学問と真摯に向き合う先輩たちに倣うべく、みずからの研究に勤しんでほしいと思います。

定めることに慣れてないうえに、テーマにしたい分野についてどのように研究を進めていけばいいのかわからないため、それは簡単な作業ではありませんでした。しかし、磯部先生のゼミは論文を書く場であるだけでなく、さまざまな視点を学ぶ場だと感じています。前期の文献についての発表においても、



高校での授業や大学1年次の基礎的な授業と、大学3年次以降のゼミとの違いは、学ぶ範囲が決まっているか否かだと思えます。ゼミではテキストとして文献を講読しますが、単に文献を読むだけでなく、それをきっかけとして自分に必要なことは何なのかを学ぶのが目的なのではないでしょうか。磯部先生のゼミは、対話的部分と、決まった正答がないという自由により、自分に足りない部分を見つけるとともに、それを成長させる場であるように感じています。学びたいことを学びたいだけ学べる、このような恵まれた環境に感謝しながら、これからもさまざまな視点に触れ、少しでも自分を成長させていけたらと思っています。

聞き手の学生から質問する機会が多くありました。ほかの学生の質問を聞くことは、自分が思いつかなかった視点を学ぶチャンスです。実際に前期では、ほかの学生の疑問や着眼点に触れることで、自分の頭の固さを痛感しました。後期では学生がそれぞれの論文の計画について発表するため、前期よりも一層自分の思考を他人に評価してもらう機会が増えます。人によって扱うテーマも異なるので、視野を広げられる学びができるのではないかと期待しています。

違いは、学ぶ範囲が決まっているか否かだと思えます。ゼミではテキストとして文献を講読しますが、単に文献を読むだけでなく、それをきっかけとして自分に必要なことは何なのかを学ぶのが目的なのではないでしょうか。磯部先生のゼミは、対話的部分と、決まった正答がないという自由により、自分に足りない部分を見つけるとともに、それを成長させる場であるように感じています。学びたいことを学びたいだけ学べる、このような恵まれた環境に感謝しながら、これからもさまざまな視点に触れ、少しでも自分を成長させていけたらと思っています。

